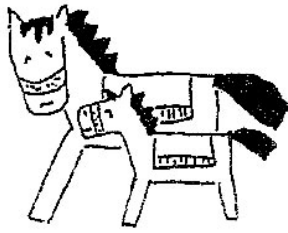


お馬のかあさん  
やさしいかあさん  
子馬をみながら  
ぽっくりぽっくり  
あるく

# おうまのおやこ

子育ても  
あせらず待ちましょ  
ポックリ、ポックリと



令和4年 12月 No.337

〒760-0044 香川県高松市御坊町2-2  
高松第二保育園内地域子育て支援センター  
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857  
<https://oumanooyako.com>



(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		12月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
12月 2日 9日 23日	金	ヨーガを楽しむ会 14:30～16:00	仲間も少しずつ増えてます。 みんなで体をほぐして軽くしていきましょう。
12月 16日	金	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	今月は市身体障害者協会の久保健治氏に、会の成り立ちや活動について話していただき、フリートークもあります。
12月 17日	土	おとなアート 14:00～16:00	希望のこもったオリジナルのトナカイを粘土で作成します。材料準備のため申し込みは12/13(火)まで。
12月 22日	木	こうさぎおはなし会 15:00～16:00	絵本や小物を使っの、みんなが 大好きなおはなし会にどうぞ。
12月 5日 19日	月	体験保育 15:00～17:00	暖かい日差しの際は外あそびをし、寒くなると 室内でみんなと一緒にあそびましょう。

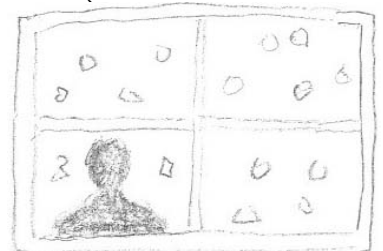
・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して  
いますので、親子でご来園下さい。  
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談(月～土) 9:00～18:00  
しつけや子育てについての悩み、保育園生活  
入園・見学についての相談もどうぞ。



金子みすゞ童話全集より

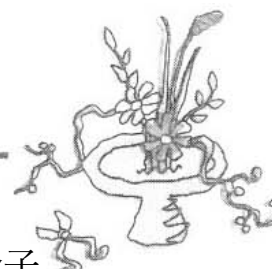
硝子のなか  
おもての雪が見えるので、  
ひらひらお花のようなので、  
あかしょうじ えがらす  
明り障子の絵硝子を、  
お炬燵にあたって見ていたら、  
うらの木小屋へ木をとり、  
雪ふるなかを歩いてく、  
お祖母さまのうしろかげ、  
ちらちら映って、消えました。



☆今月の内容 — シールが教えてくれたこと  
避けて通れないうちの悩み



## シールが教えてくれたこと



清水 玲子

ある保育園の四歳児クラスで、『話し合いから～シールをめぐってみえてくる子どもの思い』と題して、保護者あてのお便りがだされた。冒頭に「なにが悪い、これが正しい、ということではなく、このお便りを最後まで読んでほしいと思います」とある。

クラスにはウォールポケットがあり、そのなかにはひとりひとりのバインダー(連絡帳として使っているもの)やお便りが入っている。そこは勝手にいじらないよう、日頃から子どもたちに伝えていた。

それでも、新しいシールを貼ったりすると、うれしくて友だち同士で見せあったりする姿が見られていたという。おとなは、そのつど声をかけた。そうすると今度は、おとなに見つからないようにこっそりやり取りをするようになってきていたそうである。

そしてある日、「新しくつけていたはずのシールがお迎えに来たら全部ついてなかった」ということが起こったのである。四歳児クラスあたりではよくあることである。

先生たちは、子どもたちと話し合いをした。自分の大事なものがなくなったときにみんなはどう感じるか、実際になくなってしまったときの気持ちを話してもらい、シールを買ってくれたお母さん、お父さんは、お仕事をがんばってお金を作っていること、そのシールがなくなったらお母さん、お父さんは次に買いたくなるかどうかと問いかける。子どもたちはよく話を聞いていたし、気持ちをたくさん話してくれたようである。

そして、バインダーにシールを貼ることをどうする?と問いかけると、「シールは貼ってこない」と言った子がいるいっぽうで、「嫌だー、シールを貼りたい!」という声が多く、「貼るならどうする?」という質問に、「バインダー勝手にいじらない」「シールははがさない」「お友だちにあげない」などの意見がでて、貼るならそれを守ることを確認したそうである。

誰がやったのかを問い詰める話し合いではなかったが、保護者がどう受け止めるか、若い担任の先生たちは心配だった。

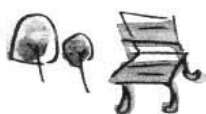
いっぽうで、先生たちは今回シールをはがした子の思いをなんとかしたいと思っていた。その子の父と母は別居し、その子はそのあいだを行ったり来たりする生活を送っていた。子どもとしてはどこにぶついたらよいかわからない不安を持ち、しかもうまくいかない両親の思いまでかぶっていたようであった。

園長先生と担任の先生たちは悩んだ末、両親をいっしょに呼んだ。シールの話だけ

でなく、保育園でみせるいろいろな姿をていねいに話した。たとえば、プールに入ったとき、赤ちゃんのように抱っこしてあげたら、その子がなんともいえずしあわせそうな顔をしたことなども。子どもは、自分ではどうにもできないことを全身で必死に耐えている。両親は、わが子の思いに触れ、おとなの関係はどうにもできなくて親子の触れ合いを大事にし、愛情を伝えることはできることを感じてくれたようである。その後、その子はずいぶんおだやかになり、シールがなくなることもなくなった。お便りはこうつづく。

「(シールを)貼らない、ということにするのは簡単です。(中略)いろいろなトラブルを日々こなしていくことで、最初はわからなかったお友だちの思い、そのうえで生まれてくる自分の思い、そんな時にどうしたらよいか、次はどうするべきか、子どもたちは学んでいきます。それはすぐにはむずかしいですが、……いつかちゃんと子どもたちの力になっていると思います。(中略)ぜひ保護者のみなさまもこのことを考えて、今後も見守っていただけたらと思います。(後略)」。

心配していた担任に、何人もの保護者から、先生の思いに感動したこと、子育てをあらためて考えたことなど、うれしい返事があった。親にも子にも真摯に向きあうこの先生たちにエールを送りたい。



## 避けて通れないうんちの悩み



保育園であるお母さんが、じつは、四歳児クラスの息子さんが、うんちのとき、紙おむつをしないとうんちができない状態なのだ、と話してくれた。それは、保護者を交えた保育園の運営会議のようなものに筆者も同席していたときだった。保育園について、どんな小さなことでも気づいたことを話してほしい、という園長先生の声かけに、そういえば、うちの子が「<紙パンツまだはいてるの？トイレでうんちできればいいのに>と〇〇先生に言われたのがいやだった、明日は言わないといいな」と言っていた日がある、と話してくれたことからわかったことだった。明るいお母さんで、それほど困っていないのかと、うかつにも思ってしまうようすだった。でも、夫婦で話し合っ、トイレの壁紙をその子の好きなキャラクター柄のものに張り替えようと考えているということを知り、おうちでもほんとうに悩んでいることがうかがわれた。

排尿はトイレでできるそうなので、ほんとうはトイレという空間そのものへのこだわりではないのかもしれないと思うが、うんちについてはもっと小さいときから保育園でもトイレではしないと決めているようで、そのうち、おしっこがトイレでできるようになってパンツになってからは、うんちがしたくなったら紙パンツにはき替えて、

そこにうんちをするようになり、現在に至っているということだった。

園長先生は、そのお子さんのそういう状態は先生たちみんながわかっていて、無理にトイレに誘ったり、紙パンツをはくことがだめなことのようにつたりしないように合意はしているけれど、さらに職員には徹底します、とお母さんにあやまった。お母さんは、トイレにいけば済むことなのに、なぜそれができないの！と自分もイライラしてしまうことがあるので、保育園ではよくやってもらっていると重ねて言っていた。

この頃では、外出先で紙パンツにはき替えることをいやがって、うちに帰りたいと言い、途中で帰ってきてしまうこともあるのだという。そしてそういうとき、うんちをがまんしているそう。うんちがトイレでできないことでいちばん困っているのはなんといっても本人だよ、と確認し、とにかく、どこで、どんなスタイルであっても無事にうんちがでたことをまずよかったと確認しよう、本人にもうんちがたくさんでることが元気に暮らしていくうえで大事なことだと感じてもらおう、とそこでは話しあった。

そのすぐ後、ある学会で、子どもの便秘について、小児科の便秘の専門の先生の講演を聞く機会があった。冒頭で、排便は、生きていくうえで必須の生命活動であるけれど、意志が少しでも働くのは入口（食べること）と出口（肛門のところではがまんするなど）だけであり、あとの仕組みは自律神経の働きで営まれていて、直接本人ががんばればなんとかなるようなものではないという話がされた。いっしょに聞いていた保育園の先生は、そのことがショックだったという。もちろん、早寝早起きや、バランスのよい食事を適度な運動などは大切であるが、子どものからだの内臓の働き方や、そのリズムがうまくいっていないとき、どこに問題があるのかを（つまり、直腸に便が残って固まっていたら、いくらからだによい食事をしてもしもその塊を大きくし、出しにくくなってしまいかもしれないなど）正確に把握しないと悪循環が起これ、子どもはその真ん中でほんとうに困ってしまうのだということであらためて学んだ。先のお子さんもしかししたら便秘があるのかもしれないと、初めて思い当たった。

子どもの思いをわかろうとするよう努力してきたが、子どものからだの声もしっかり聴けるようになりたいと思う。

清水 玲子（しみず れいこ）

1947年埼玉県生まれ。元東洋大ライフデザイン学部教授。乳児保育、保育原理などを担当。保育実践研究会代表・さんこうほれんメンバー。

著書：「保育園の園内研修」（筒井書房）、「育つ風景」（かもがわ出版）、「徹底して子どもの側に立つ保育」（ひとなる書房）、「保育における人間関係発達論」（共著・ひとなる書房）、「いい保育をつくるおとな同士の関係」（共著・ちいさいなかま社）、「育ちあう風景」（ひとなる書房）ほか。

